

パサーージュ 遊歩と移行のトポス

竹峰義和

1 〈通路〉としての『パサーージュ論』

一八九二年にベルリンで生まれたヴァルター・ベンヤミンは、一九四〇年に自殺するまでの四十八年の生涯のうち、その後半の多くの歳月を、『パサーージュ論』と題された壮大なプロジェクトに捧げた。「パサーージュ」とは、直接的には、一八二〇―三〇年代のパリに登場したアーケード屋根つきの商店街の歩廊を指しているが、『パサーージュ論』で扱われる対象は、それにとどまることなく、百貨店、室内装飾、パノラマ、^{ダゲレオタイプ}銀板写真、鉄筋建築、モード、万国博覧会、^{フラヌール}遊歩者、娼婦、賭博など、第二帝政期のパリを織りなす事象から、さらにはボードレール、フーリエ、サンシモン、マルクスといった芸術家や思想家にいたるまで、実に多岐に及んでいる。その意味では、『パサーージュ論』において「パサーージュ」は数多くの主題のなかの一つにすぎないわけだが、ベンヤミンの企図はむしろ、「十九世紀の首都」としての近代都市パリを、さらには十九世紀近代の商品資本主義社会そのものを、一つの〈通路〉^{パサージュ}として捉え直すことであつたといえるだろう。その理由については、このあと『パサーージュ論』の思想的内実を見ていくなかであらためて説明するこ

とにしたいが、そもそも、『パサージュ論』というテクスト自体が、迷宮のように複雑に入り組んだ〈通路〉という趣きを漂わせている。周知のように、『パサージュ論』のプロジェクトは、ベンヤミンの生前には完成にいたることなく、単独の論文や概要として発表された幾つかの文章を除いては、膨大な量のメモ書きと引用の束が遺されているのみである。現在それらは『ベンヤミン全集』の編纂者によって四十個ほどのテーマごとに整理・分類され、解説も含めて一三五〇頁ほどの書物としてまとめられており、初期草稿を除いては全五巻からなる邦訳も存在している。だが、それらの断章群は、普通の書物を読むときのようには、冒頭から末尾の言葉へといたる、蛇行しつつも途切れのない一本の線をたどるような目的論的な読み方を強いるものでも、そのようなアプローチを許すものでもない。『パサージュ論』という書物を読む行為はむしろ、パリのパサージュの狭く薄暗い路地をあてもなく徘徊する遊歩者の歩みや、あるいは、万国博覧会や百貨店の棚に無造作に陳列された展示品や商品を次から次へと眺めていくことに似ているといえるだろう。おもむろにページを開いた読者は、迂回したり、歩みをとめたり、立ち戻ったり、別のところに移ったりしながら、ランダムに並べられた無数の断片と断片のあいだを、ひたすら通り過ぎるのであって、そこには、辿られるべき順路も、通り抜けられるべきチェック・ポイントも、到達されるべき最終地点も存在しないのである。『パサージュ論』のなかでベンヤミンは、遊歩者のように「自分が何を待っているのか分からないとき、われわれは倦怠を感じる」(DZT〔一／三三七〕)と述べているが、⁽¹⁾だからといって、『パサージュ論』という通路を讀者として通り抜けることは、刺激を欠いた退屈な経験にすぎないわけではない。パリの街をさまざまよう遊歩者が、うらぶれた店先で意外な掘り出し物に出逢ったり、かつての恋人とよく似た面影の人とすれ違ったり、狭い路地が思いがけない場所に通じていることを偶然発見したりするように、『パサージュ論』の膨大な断章群を遊歩するたびに、われわれもまた、一見すると目立たない記述や些事に思われるような引用から、さまざまな発見や遭遇を経験することとなるだろう。そして、ベンヤミンによれば、遊歩者

の漫然とした歩みとは、独特の疲労感と陶酔感のなかで、失われた過去の世界へと沈潜していく歩みでもある。「街路はこの遊歩者を遙か遠くに消え去った時間へと連れていく。遊歩者にとってはどんな街路も下り坂なのだ」(M11「三／七八」)。つまり、パサーージュを通過するという経験は、空間的に移動するだけではなく、現在と過去とのあいだ、いま在るものとかつて在ったものとのあいだを行きかうことでもあって、「靴の底ざわり」(M11「三／七七」)でもって遊歩者は、街路に刻まれた無数の過去の痕跡から「遙か遠くに消え去った時間」に思いを馳せるのである。以下では、過去の追想というこのモティーフが、『パサーージュ論』という無数の〈通路〉からなる迷宮を遊歩するにあたって一種のアリアドネの糸となるということを、ベンヤミンのテキストを適宜引用しつつ明らかにしていきたい。

2 『パサーージュ論』の成立

『パサーージュ論』の思想的内容について検討するまえに、このプロジェクトの成立について手短かに説明しておこう。一九二五年にフランクフルト大学に教授資格請求論文として提出した『ドイツ悲劇の根源』が、難解さを理由に受理を拒否されるという出来事によってアカデミックなキャリアを断たれたベンヤミンは、そのあと、プルーストの『失われたときを求めて』の共訳の仕事の関係もあって、たびたびパリに長期滞在する。そして、みづから遊歩者としてパリの街路をさまざまい歩くなかで、一九二七年半ばごろより、ベン

(1) 以下、『パサーージュ論』からの引用にあたっては、Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, hg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schwepgehäuser unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, Frankfurt a.M.: Suhrkamp, Bd. V, 1991の断片番号(概要にあたる「パリ——十九世紀の首都」からの引用は頁数)を()内に記したうえで、「」内に対応する邦訳(ヴァルター・ベンヤミン『パサーージュ論』全五巻、今村仁司／三島憲一他訳、岩波現代文庫、二〇〇三年)の巻数と頁数を漢数字で示す。

ヤミンのなかに、「パリのパサージュ。弁証法的な妖精劇」という表題のエッセイを執筆するという構想が徐々に芽生えていく。それは、十九世紀の近代都市パリを特徴づける諸現象を素材として、そこに夢想的なイメージとして沈殿する集団的無意識を解説するというものであり、モデルとされたのは、シュルレアリスムたちによる夢のパスペクティヴから都市風景を再構成する手法——具体的には、まさにベンヤミンのパリ滞在期と同時期に刊行された、アラゴンの『パリの農夫』（一九二六）とブルトンの『ナジャ』（一九二八）——だった。『ドイツ悲劇の根源』においてベンヤミンは、十七世紀のドイツのパロック悲劇にしばしば登場する被造物の屍骸が散乱する「廃墟」的な光景を、〈救済〉をアレゴリーの表現する文字として読解したわけだが、『パサージュ論』では、近代資本主義システムにおける商品や廃物をアレゴリー的な読解の対象とすることで、ブルジョワ商品世界の「夢解釈」をおこなうことを企図したといえるだろう。そして、すでに初期の段階からベンヤミンは、『パサージュ論』の最終的な狙いを、十九世紀という夢の眠りからの「覚醒」を導くことに置いていたのだが、ただし、この「夢からの覚醒」という契機が、「革命」というマルクス主義的な含意を明確に帯びるようになっていくのは、一九二九年秋にベンヤミンが、『パサージュ論』の最初の原型となった草稿をめぐってホルクハイマーとアドルノと議論を交わし、そのなかでマルクスの『資本論』を徹底的に読み込む必要があると痛感してからのことである。そのあと、マルクスの研究を進めつつも、いったんはパリ研究の構想を中断したベンヤミンであるが、政治情勢のある決定的な変化が、『パサージュ論』のプロジェクトを進めるための絶好の環境を整えることとなる。すなわち、一九三三年一月末のヒトラーの権力掌握からわずか一ヶ月半後に、左翼にしてユダヤ人という二重のハンディを負ったベンヤミンは、ベルリンからパリに亡命するのであり、一九四〇年六月にドイツ軍がフランスに侵攻する直前まで、この「十九世紀の首都」を本拠地として、苦しい亡命生活を過ごすことを強いられるのである。亡命した当初は、フリーのジャーナリストや講演、ニューヨーク亡命中の社会研究所のための注文仕事など、「食うた

めの仕事」に時間を取られがちであったベンヤミンだが、一九三五年春、研究所から『パサージュ論』の全体構想の概要を送るよう命じられたことが機縁となって、長年中断されていたパリ研究を再開する決意を固める。そのとき書き上げられた概要が、三五年五月成立の「パリ——十九世紀の首都」であり、それから、パリの国立図書館に終日籠りつつ、メモや抜き書きの作成に専念するかたわらで、「複製技術時代の芸術作品」初稿（一九三五）、「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」（一九三七—三八）、「セントラルパーク」（一九三八—三九）、「ボードレールのいくつかのモティーフについて」（一九三九）という三本のボードレール論、絶筆となった断章形式のテーゼ「歴史の概念について」（一九四〇）にいたるまで、およそ五年間にわたって、『パサージュ論』に関連する仕事に集中的に取り組んでいく。しかし、一九四〇年六月のパリ陥落の直前に、『パサージュ論』の膨大な草稿を国立図書館に託してマルセイユへと逃れたベンヤミンは、アメリカに再亡命する途上の一九四〇年九月二十六日夜、ピレネー山脈の地中海に臨むスペイン側の国境の町ポル・ボウで、入国を拒否されたショックからモルヒネ自殺を遂げるのであり、それによって『パサージュ論』は、結局のところ完成にいたることなく終わってしまう。十九世紀の首都パリを対象に、通り抜けることを表題に掲げた書物の執筆に打ち込んでいたベンヤミンが、フランス国境を通過できなかったことが原因となって、自殺——死へと向かう一方通行路——へと追い詰められたことは、あまりに皮肉な結末であるといわざるをえないだろう。

3 ファンタスマゴリー——夢と覚醒の弁証法

このように、『パサージュ論』のプロジェクトは、かなりの長期間にわたって成立したものであり、内容的にも多岐に及んでいるうえ、未完に終わったという点もあいまって、その全体像をまとめることはいさ

さか難しい。だが、基本的なコンセプトは、一九二七年の時点でベンヤミンが、シュルレアリスムから触発されるかたちで構想した、近代資本主義社会の集団的無意識のアレゴリー的解読という点で一貫しているということができよう。ただし、すでに示唆したように、一九二九年にベンヤミンが、ホルクハイマーとアドルノに促されて、マルクスの『資本論』の研究に没頭したことによって、『パサージュ論』の全体構想が、ベンヤミンのいうところの「歴史唯物論的」な方向へと転換していく。なかでも、ベンヤミンがマルクスから継承した重要な概念の一つが「ファンタスマゴリー」であって、一九三五年以降のテクストにおいては、「ファンタスマゴリー」が商品資本主義社会の本質をなすものとして位置づけられるようになる。²⁾「ファンタスマゴリー (Phantasmagorie)」とは、ギリシャ語で「幻」や「幽霊」をあらわす「phantasma」からつくられた造語であり、元々は一七九八年にベルギー人のロバートソンがキルヒヤーの魔術ランタンを改良するかたちで考案した可動式の幻燈機を指している。だが、思想史的な文脈において「ファンタスマゴリー」という言葉が重要な含意を帯びたものとして登場してくるのは、『資本論』第一巻の「商品の物神的性格とその秘密」のなかでマルクスが記した、「ここで人間にとって事物と事物との関係というファンタスマゴリー的な形態をとるものは、ただ人間自身の特定の社会的関係でしかない」という有名な一文によってである。資本主義生産様式において、具体的な有用労働によってつくりだされた諸事物の使用価値が、普遍的・抽象的な交換価値によって隠蔽され、それぞれの事物が「物神的性格」を帯びた「商品」という幻影的な形態をとってあらわれるという現象にたいしてマルクスは「ファンタスマゴリーの」という形容詞を附与したわけだが、マルクスの死から約半世紀後、この比喩表現が、パリ亡命中のベンヤミンによってふたたび取り上げられ、『パサージュ論』の理論的中核へと据えられるのである。ただし、マルクスにあってファンタスマゴリー的なヴェールを纏うのは、あくまで個々の商品の次元にとどまるのにたいして、ベンヤミンは「商品に物神的性格を付与する特性は、商品を生産する社会そのものに属する」と拡大解釈を施したうえで、「社会が

みずからにたいしてつくりだすイメージ (Bild) が「……」ファンタスマゴリー」の概念に対応する」(XI:3a [四ノ二四四])と規定する。パサージュや遊歩者に象徴される、第二帝政期のパリを彩る事物や現象とは、近代ブルジョワ商品社会がおのれをイリュージョナルなかたちで飾り立てる「ファンタスマゴリー」にほかならず、深刻な矛盾を孕んだ現実を焔びやかな幻想によって包み込む「イメージ」の数々のうちに表現された「集団的無意識」から、アレゴリーのなまなざしを介して、「歴史的覚醒」の契機を弁証法的に抽出することこそが、『パサージュ論』のなかでベンヤミンが最終的に企図したことだと要約することができる。

では、どのようにしてベンヤミンは、商品資本主義社会を特徴づける「ファンタスマゴリー」的な夢想から「歴史的覚醒」の契機を引き出すというのだろうか。それを考えるための糸口となる一文が、『パサージュ論』の全体構想の概要として位置づけられた「パリ——十九世紀の首都」の最終節に記されている。「目覚めの際に夢の要素を利用するのは、弁証法的思考の模範的な例である。それゆえに弁証法的思考は、歴史的覚醒のための器官なのである。あらゆる時代は次の時代を夢見るだけでなく、夢見ながら覚醒に向かって突き進んでいくのだ。あらゆる時代はその終焉を自分のなかに含んでいく」(59 [一/三〇])。要するに、ここでベンヤミンは、資本主義的生産様式それ自体のうちに自己崩壊を導く矛盾的な契機が潜伏しているとすするマルクスのテーゼを、「夢」のうちなる「覚醒」という比喻でもって言い換えているわけであるが、ブルジョワ社会の夢想のうちに含まれる「終焉」と「覚醒」の世界とは、まさにベンヤミンが「複製技術時代の芸術作品」において予言的に描き出した、「アウラ崩壊」後のプロレタリア大衆が支配する世界にほかなら

(2) 「ファンタスマゴリー」の歴史にまつわる以下の記述は、拙著『アドルノ、複製技術へのまなざし——〈知覚〉のアクチュアリーティ』青弓社、二〇〇七年、一〇七—一〇八頁に基づく。

(3) Karl Marx, *Das Kapital I*, in: K. Marx/ Friedrich Engels, *Werke*, Bd. 23, Berlin 1962, S. 86. [カール・マルクス『資本論』第一巻〕①、今村仁司／三島憲一訳、筑摩書房、二〇〇五年、一一二頁。

ない。つまり、ベンヤミンの弁証法的思考において、十九世紀近代とは「夢見ながら覚醒に向かつて突き進んでいく」時代にほかならず、そこで醸し出される「ファンタスマゴリー」という「夢」のうちにも、複製技術時代の到来とともに最終的に実現するはずの「歴史的覚醒」の契機が、萌芽的なたちで胚胎しているのである。そして、「夢」と「覚醒」の弁証法的関係について考察するにあたって、ベンヤミンがまず着目するのが、ファンタスマゴリー的な商品社会のなかで登場する、一見相容れないような契機がたがいに重なり合い、夢のように入り混じりあうという現象である。たとえば、街路でありながらも室内空間であり、物売る場所であるながらも通路であるというパリのパサージュや、あるいは、商品にして売り手である娼婦がその典型であるが、それらは、ベンヤミンの解釈によれば、「商品」がもつ使用価値と交換価値という二重性のアレゴリーであって、モノが使用価値から切り離され、自由に浮遊するなかで、固有の境界や輪郭がぼやけ、あらゆるものがたがいにイメージとして交錯し、結合しあうようになるのである。遊歩者が通り抜けていくパサージュとは、まさにそのような夢のイメージ空間をなしているといえるだろう。そして、ベンヤミンは、パサージュを「その過去の存在に導くアーケード」(arcade)と定義することによって、パサージュに象徴される「夢」としての位相のうちに、「過去」へとつうじる〈通路〉を見出すとともに、さらにそれを「幼児期」へと関係づけていく。「ある世代の幼児期の経験は、夢の経験と多くの共通点をもっている。その歴史的形態が夢の形象である。どの時代も夢に向かうというこうした側面を、つまり子供の側面もっている。十九世紀にとって、こうした側面がかなり明瞭に浮かび上がっていきるのは、パサージュにおいてである」(KJ, I (三/五))。つまり、十九世紀のブルジョワ社会が集団的体として夢見るファンタスマゴリーは、幼児の知覚経験に親和しているのであり、ベンヤミンが『パサージュ論』の原型と見なしていた短文集『一方通行路』(二九三—二六)の表現を借りるならば、「遊びながら実にさまざまな種類の素材相互のあいだに、飛躍に富んだ新しい関係をつける」³⁾ような幼い子供たちの能力が、商品世界のファンタスマゴリーのなかで

再生されるのである。そして、複製技術論文においてベンヤミンが、諸事物をたがいに自由に結びつけることによって「集団的な夢の形象」を形成するという可能性を、映画というテクノロジー・メディア——とりわけ、モンタージュやミッキー・マウス——のうちに認めるのも、その延長線上で捉えることができるだろう。

だが、ベンヤミンが商品社会の「ファンタスマゴリー」のうちに看取した幼年期の知覚との密かな親和性は、さらにより深いところで失われた過去につうじている。すなわち、『パサージュ論』においてベンヤミンは、幼年期の知覚を、人間と自然と宇宙がたがいに照応しあっていた「太古の象徴世界」につながっていくものと見なすのである。「近代的な技術の世界と、神話の太古的な象徴の世界とのあいだには照応関係の戯れがある。『……』どんな幼年期も『……』技術的な革新の成果に向けられた好奇心を、諸々の古い象徴の世界と結びつける」(Zitat「三〇/一八二以下」)。かくして、幼年期を媒介とするかたちで、〈近代〉の資本主義社会と〈太古〉の神話世界とがたがいにオーヴァラップすることとなるのだが、このような、十九世紀社会の無意識的な夢のなかに秘め隠された〈太古世界〉への回路について、「パリ——十九世紀の首都」は明確に、来るべき「無階級社会」というユートピア的なヴィジョンが醸造されるための一種の酵素として規定している。「あらゆる時代は、それが見る夢のなかで、自分の次の時代がイメージとなって現れるのを目の当たりにする。このとき次の時代は根源史の、すなわち無階級社会の諸要素と結びついて出現するのである。集団の無意識のなかに貯蔵されている無階級社会の経験は、新しいものと浸透しあってユートピアを生み出す」(4「二〇/八」)。そして、最初の問いに戻るならば、〈近代〉と〈太古〉とのアレゴリー的な交錯関係のなから浮上するこの「ユートピア」こそが「歴史的覚醒」を導く一つの契機をなしているといえるだろう。『パサージュ論』のある断章で、「われわれが「かつて在ったもの」と呼ぶ夢が、実のところそれに関連

(4) Benjamin, *Einführungsgl.*, in: ders. *Gesammelte Schriften*, a.O., Bd. IV, S. 93. 『ベンヤミン』『方通行路』、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・

コレクション3——記憶への旅』所収、ちくま学芸文庫、一九九七年、三四頁。

しているような覚醒の世界としての現在を経験するための技法である」(Zsig[三/七])とされているように、「かつて在ったもの」としての幼年期や神話的太古の痕跡を、ファンタスマゴリーとしての商品世界のうちに読み取っていくまなざしこそが、夢見るブルジョワ社会を「覚醒」させるための契機となりうるのである。

4 〈廃墟〉としての商品世界

とはいえ、一八二〇—三〇年代に流行したパリのパサージュがたちまち廃れ、百貨店へと統合されていたように、あるいは、独特の相貌をそなえたパリの路地が、オスマンの都市改造計画によって次々に消滅したように、つねに〈新しいもの〉を希求することをやめない高度資本主義の自己運動は、過ぎ去ったものすべてを「流行遅れ」の名のもとに徹底的に否定するという身振りによって特徴づけられるはずであろう。だとするならば、ベンヤミンが商品世界を「覚醒」へともたらずための密かな希望を託したパサージュや遊歩者などの諸現象もまた、つねにモードを更新しつづけなければならぬという強迫観念のなかで、より新しく今風に見えるものによって絶えず置き換えられることで、「かつて在ったもの」との密かな〈通路〉とともに、完膚無きまでに破壊されてしまうのではないだろうか。しかしながら、「新しいもの」を熱狂的に追い求める商品資本主義のシステムとは、同時に、「古いもの」・「流行遅れのもの」を大量産出するシステムであるということを見逃してはならない。新商品として市場に華々しく登場し、一度は高い交換価値を享受したモノであっても、新たな商品が現れたり、手垢がついたりすることに価値喪失していき、やがては使用価値も交換価値もほとんどたないガラクタとして、古道具屋の棚先で埃まみれのままに忘却されるか、あるいはゴミとして廃棄処分される。それは、商品交換の生きたプロセスから脱落した諸事物が営む第二の生であり、いうなれば〈死後の生[Nachleben]〉であって、その意味において、あらゆる商品は生から死

へと移行^{パサージュ}することを免れないのである。商品世界のファンタスマゴリーの輝かしい仮象の影には、かつての商品の哀れな屍骸が累々と積み重なっているのであり、いかなる新商品であっても、市場に出たその瞬間から、時間による腐食作用に否応なく犯され、死と忘却に向かつて着実に堕ちていくことは避けられないのだ。『パサージュ論』のなかでベンヤミンが、ブルジョワ資本主義社会を「廃墟」として繰り返し規定するのは、まさにこうした意味においてである。華やかなイルミネーションで飾られた百貨店や万国博覧会のような「ブルジョワジーのモニュメントの数々」は、すべてを「破局」というパースペクティヴから眺めるメランコリカーのまなざしにとつては、おのれの「没落」をうちに秘めた束の間の移ろい過ぎゆく現象として、「崩壊するまえにすでに廃墟となっている」(S. 11/311)のである。そして、このように、ファンタスマゴリーのな夢想のうちに「没落」のアレゴリーとしての「廃墟」を読み取っていくこともまた、夢のうちなる覚醒を導くための一つの手段をなしているわけであるが、ただし、夢から覚醒への移行というモチーフを、マルクス主義的な図式に単純に置換し、産業資本主義体制からプロレタリア大衆社会への革命的な移行としてのみ捉えるならば、ベンヤミンのいう歴史唯物論の意味を完全に取り違えることになる。絶筆となつた「歴史の概念について」で強調されるとおり、歴史が空虚で均質的な時間を直線的に進行するなどという進歩主義的な観念は断固として退けられなければならない。ベンヤミンがイメージする「解放された人類」とは、むしろ「みずからの過去の、そのどの瞬間も、呼び出すことができるようになってい⁽⁵⁾る」。つまり、それは、現在と過去、かつて在つたものと来るべきものとのあいだを軽やかに遊歩し、自由に移行^{パサージュ}できるような存在であつて、「あらゆる瞬間が、メシアがそれを潜り抜けてやってくる可能性のある、小さな門」

(5) Benjamin, «Über den Begriff der Geschichte», in: ders., *Gesammelte Schriften*, a.a.O., Bd. I, S. 694. 「ベンヤミン「歴史の概念について」」, 浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション』——近代の意味』所収、ちくま学芸文庫、一九九五年、六四七頁。

(6) Ebd., S. 704. 「同」, 六六三頁。

をなすとされる以上、救済と解放の瞬間へと至るための〈通路〉は、革命実践を待たずとも、すべての時間や空間にたいしてもつねにすでに開かれているのである。そして、そこで遊歩者や歴史家によって召喚される「みずからの過去」とは、すでに触れた「幼年期」や「神話的太古」というモチーフによって示唆されていた「かつて在ったもの」と同一ものを指しているといえるだろう。しかし、ベンヤミンの言う「かつて在ったもの」とは、実際のレヴェルで現実起こったものだけに限定されるわけではない。ベンヤミンが遊歩者を「追想としての陶醉」(Mis「七九」)に耽っている存在として規定するとき、そこで問題とされているのは、たんなるノスタルジーではまったくくない。それはむしろ「当該の空間で潜在的に起こったかもしれないことを、同時に知覚」(Mis「八三」)すること、すなわち、かつて起こりえたはずの過去という実現しないままに終わったユートピア的な可能性の痕跡を知覚することにほかならないのだ。「幼年期」や「神話的太古」といった比喩形象で語られる「かつて在ったもの」へのまなざしとは、かつて未来への豊かな萌芽だったものが、まったく実を結ばないままに過去のものとなって死滅していくなかで、そのような死産に終わった過去形の未来を追想するようなまなざしであった、その意味において、「かつて在ったもの」としての過去を志向することが、同時に、来たるべきユートピアを志向することにつながっていくのである。

5 おわりに

以上、『パサージュ論』の成立と内容について駆け足で概観したが、そのなかでベンヤミンが問題にしていたことは、大雑把に言うならば、まさに〈移行〉という経験と、そのトポスとしての〈通路〉であったといえるだろう。ここでの〈移行〉や〈通路〉とは、まずは空間的な意味で捉えられるべきものである、すなわち、さまざまな事物が陳列された狭い無数の通路が、分岐し交錯しあいながら、複数の領域を横断し、異

なる場所と場所とをたがいに繋ぎ合わせるなかで、複雑な網目状のネットワークを構成する空間こそが「パサーージュ」であって、それはまた、ベンヤミンの領域横断的な思考のイメージと限りなく重なるという意味で、ベンヤミンの思考そのものがパサーージュ的な〈通路〉としての特徴を帯びているということもできるかもしれない。だが、すでに確認したように、ベンヤミンにとつて、パサーージュという〈通路〉を潜り抜けるなかで可能となる経験とは、時間的な意味における〈移行〉の経験でもあった。すでに引用した一節にあるように、「街路はこの遊歩者を遙か遠くに消え去った時間へと連れていく。遊歩者にとってはどんな街路も下り坂なのだ」。つまり、パサーージュをあてもなくさまよう遊歩者は、現在と過去の敷間が曖昧に融解するなかで、いつしかへかつて在ったものとしての「遠くに消え去った時間」へと誘われていく。それは、幼年期の失われた夢のイメージ世界や、万物が照応しあう神話的太古の世界につうじるユートピア的位相を孕んでいると同時に、移ろい去りゆく流行と時間の流れに晒されるなかで、「崩壊するまえにすでに廃墟」になっている商品世界というディストピア的位相を開示するものでもある。しかし、パサーージュの経験のなかで、現在に重ねあわされる複数の過去のうちには、かつて起こるはずであったもの・在るべきであったもの、という実現されなかった潜在的可能性としての反実仮想的な過去もまた包含されており、それこそが、『パサーージュ論』の基底につねに潜伏する〈救済〉への志向の原動力をなしているのである。